
女子サッカーにおける最近の動向

1) 大学サッカー選手の実態

渡辺貫二¹ 芦原正紀² 秋田信也³ 中沢克江³ 菊池武道⁴

¹国際学院埼玉短期大学 ²湘南工科大学 ³東邦大学 ⁴千葉大学

Circumstances in Recent Women Soccer

- Actualities of Soccer Player in University -

Kanji WATANABE¹, Masanori ASHIWARA², Sinya AKITA³, Katsue NAKAZAWA³
and Takemichi KIKUCHI⁴

¹Kokusai Gakuin Saitama Junior College, ²Shonan Engineering University

³Toho University, ⁴Chiba University

I. 目的

近年における日本女子サッカー界の活躍は、目を張る早さで世界の強豪チームの仲間入りができるようになりつつある。最近の活躍としては、1996年アトランタで行われたオリンピックへの出場⁷⁾、「女子ワールドカップ」の第1回大会(1991年)、第2回大会(1995年)と連続出場し、現在は1999年の第3回女子ワールドカップへの出場権も得ている⁶⁾。なお、1990年北京および1994年の広島でのアジア大会においては銀メダルに輝いている³⁾。国内においては、1980年より女子の日本一を決める「全日本女子サッカー選手権大会」が始まり、1989年には「日本女子サッカーリーグ(現在は「Lリーグ」)」がスタートしている⁵⁾。

日本の女子サッカーは1970年代に活発になり、日本サッカー協会は選手登録規定の「第五種」として、1979年からチームの登録を受け付け、この年は五十二チームの登録があった¹⁾。その後1997年には千百三十七チーム、登録選手数二万三千人以上にもほり全日本女子女子ジュニアサッカー選手権大会大会・全日本高等学校女子サッカー選手権大会などが開催されるようになってきた⁴⁾。また、1997年から女子サッカーも国体の正式種目になったことは周知のことである。このような日本の女子サッカー界ではあるが、これまでの

日本の代表選手のほとんどはクラブチームの選手が多く、大学サッカー選手は少ないのが現状である。女子サッカーの歴史は男子から比べればまだまだ日が浅く、その規模はまだ小さい⁵⁾。しかし、このような状況のなかで大学女子サッカーも徐々にではあるが、レベルの向上が図られ、1998年には「第7回全日本大学女子サッカー選手権大会」を神戸市を中心に行うなど、全国的に組織化されつつある。これまでは、大学女子サッカー選手の試合内容、体力、形態などについて報告してきた¹¹⁻¹⁴⁾。本研究は今後の選手育成と指導に役立てることを目的に、大学女子サッカー選手の実態について分析を試みたものである。

II. 調査方法

調査対象者は、1996年8月17日から20日まで筑波大学で行われた「全国大学女子サッカーつくばフェスティバル」に参加した22大学女子サッカーチームの内、協力してくれた10大学チームである。大会期間中に開かれた代表者・顧問会議において主旨の説明をおこない、調査の協力を依頼し了承を得た。アンケート用紙は大会後、各大学の責任者に送付し十月中旬までに返却をお願いした。調査内容は、「サッカー経験年数」「経験した時期」「遊びでの経験」「授業での経

験」さらに「大学入学までの運動部ならびにスポーツ経験種目」などである。

回答者は172名(回収率86.5%)である。回答学生の内訳は、一年生60名(34.9%)、二年生46名(26.7%)、三年生33名(19.2%)、四年生33名(19.2%)である。

Ⅲ. 調査結果

1、サッカー部経験年数および時期

現在まで学校のサッカー部および地域のクラブでサッカーを経験した経験年数について、学年別に分け表Iに示した。経験年数の設問は、調査した時期が9月であったことから、大学入学時にサッカー部経験年数が明らかになるように、半年単位での回答を求めたものである。

その結果、大学入学時にサッカー部に入学した者は一年生(0.5年経験)が37名、二年生(1.5年経験)が34名、四年生の27名、ついで三年生の16名の順で、これは合計125名となり、高等学校時代までにサッカー部および地域クラブでのサッカー未経験者は調査対象全体の73%を占めている。

一方、大学以前のサッカー部および地域クラブの経験者の中で大学三年生が大学時代を含めてではあるが、10.5年と長い経験年数を示す者もいる。また、サッカー部員として活躍した時期および所属を学校時代別に図1に示す。サッカー部経験者は47名であるが、学校時代別に表すと64名となり、これは継続して部活動を行っているためである。その中で最も多いのは高等学校時代が36名である。所属は学校の部活動が22名、地域のクラブが14名である。

次いで多いのは小学校時代の23名、所属の内訳は学校のクラブが13名、地域クラブおよび少年団が5名ずつである。これらに比較して幼児期および中学校時代の経験者は少ない人数であった。

大学以前にサッカー部を経験した学生(経験者群)と大学に入学してからサッカーを始めた学生(大学群)についての比

較を表IIに示した。経験者群は47名(27%)、これに対して大学群は125名(73%)と明らかにサッカー未経験者が多い現状である。47名の経験者群を各学年で見ると一年生23名(49%)、二年生11名(23%)、三年生8名(17%)、四年生5名(11%)と、上級生に比較し下級生ほど大学入学以前にサッカー部を経験した学生が多い傾向にある。

2、体育の授業でサッカーを経験した時期

幼児期から高等学校時代までの体育の授業で、サッカーを経験した時期についてその経験学年を図2に示した。最も多いのは小学校、その中でも5・6年生に経験した者が大学生の各学年とも一番多く、次に4・3・2・1年生と低学年になるにしたがい経験が少な

表I サッカー部経験年数

経験年数	一年生	二年生	三年生	四年生	全体
0.5	37				37
1		1	2		3
1.5	2	34	7		43
2		1			1
2.5	7		16	1	24
3					0
3.5	13	1		27	41
4					0
4.5		3			3
5		1			1
5.5		2	3		5
6				1	1
6.5			2	3	5
7					0
7.5	1	1			2
8					0
8.5		1	1		2
9					0
9.5		1		1	2
10					0
10.5			2		2
合計	60	46	33	33	172

表II 大学入学以前にサッカー部を経験した群と大学で始めた群の比較

	一年生		二年生		三年生		四年生		全体
大学群	37	30%	35	28%	25	20%	28	22%	125
	62%		76%		76%		85%		73%
経験者群	23	49%	11	23%	8	17%	5	11%	47
	38%		24%		24%		15%		27%
合計	60	35%	46	27%	33	19%	33	19%	172

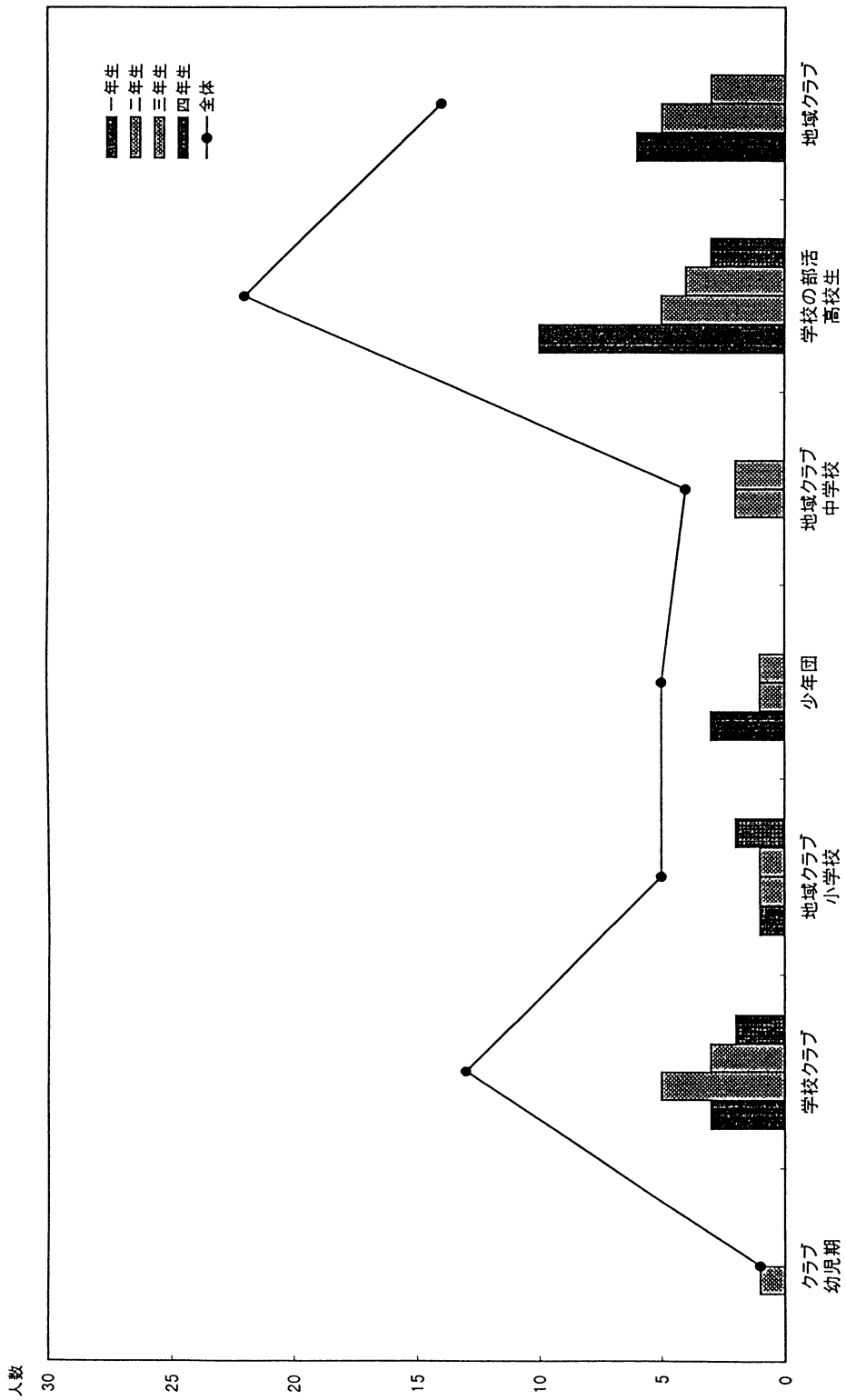


図1 大学以前サッカー一部を経験した時期および所属

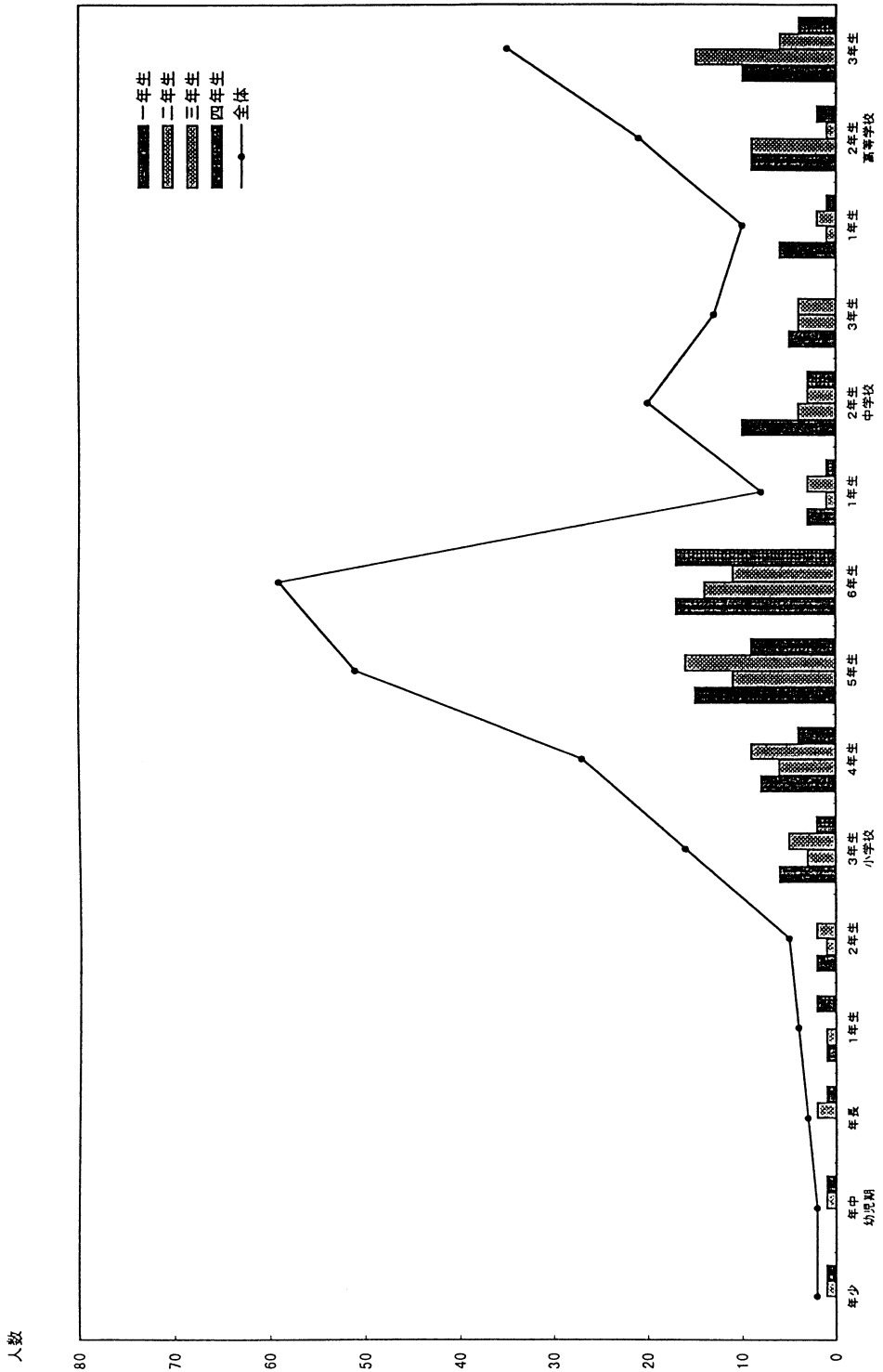


図2 体育の授業でサッカーを経験した時期

くなっていた。小学校に次いで多いのは、高等学校の時期で、その中でも高等学校三年生の時が最も多かった。

学年別にみると大学一年生は高等学校3年間平均していたが、大学二年生は高等学校1年生の時少なく、学年が進むにつれ多い傾向にあった。これらに対して、中学校の時期は大学一年生が中学校2年時に経験した者が多く、一般的に授業での経験者は少なかった。

3, サッカーを遊びで経験した時期

幼児期から高等学校までの間に、サッカーを遊びで経験した時期について図3に示した。最も多いのは小学校の高学年で、次いで小学校の低学年であった。高学年の中では、大学一年生が多く大学二年生は少なかった。低学年では逆に大学二年生が多く大学一年生が少なかった。幼児期にサッカーを遊びで経験した者は、全員大学一年生で、しかも4名とかなり少ない人数であった。サッカー遊びの内容は、ミニサッカー、ラインサッカー、自由にルールを決めたサッカー、ボールを蹴って遊ぶなどである。

4, 運動部およびスポーツクラブの経験種目と時期

幼児期から高等学校までに、学校のクラブ・部活動、地域のスポーツクラブ（以後地域クラブ）、スポーツ少年団（以後少年団）、その他のスポーツクラブなどで経験した運動・スポーツ種目と経験時期について表IIIに示した。幼児期においては、14名の経験者がおり、その中の8名は水泳経験者で、所属が幼稚園と地域クラブで、それぞれ4名ずつであった。体操の経験者3名は2名が幼稚園で1名が地域クラブであった。残り3名はそれ以外の種目で、所属が地域クラブかその他での経験であった。

小学校では、学校のクラブ経験者が89名、少年団33名、地域クラブ13名、その他のスポーツクラブ16名であった。半数以上の者が学校のクラブ経験者である。小学校で経験したスポーツの中で多い種目はバスケットボール、バレーボール、ソフトボール、水泳、陸上競技、剣道の順である。特にバスケットボールの経験者が多い。なお、その他の種目は、ラグビー・ドッチボール・バレエなどであった。

中学校では、170名が学校の部活動経験者であった。また所属が重複したものと思われ合計178名と6名の

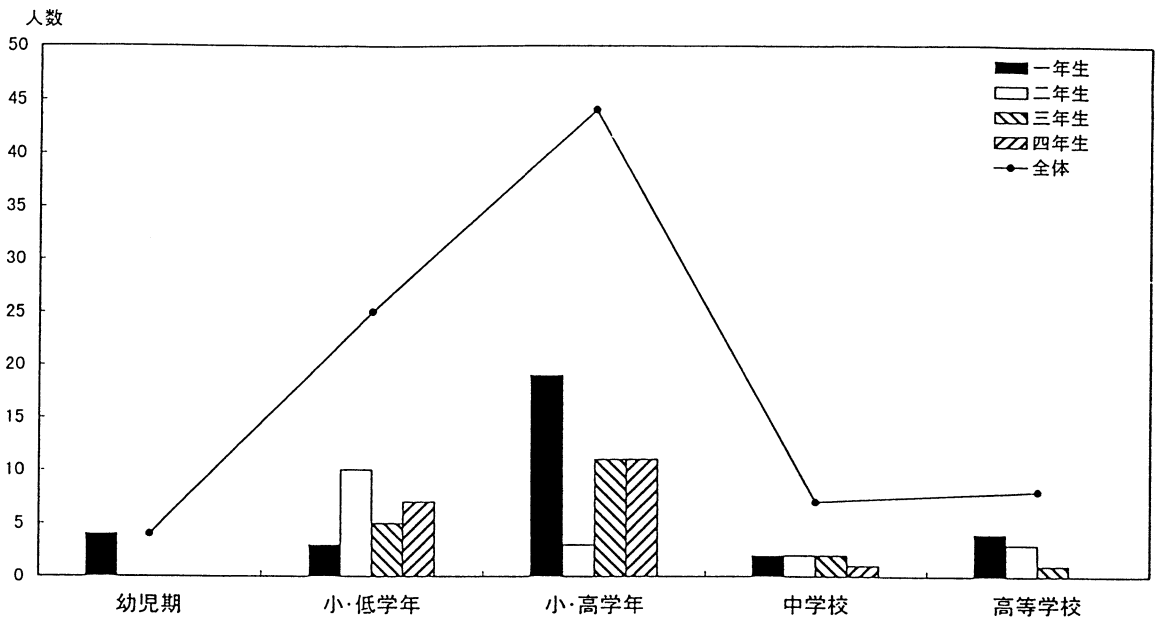


図3 サッカーを遊びで経験した時期

表Ⅲ 運動部およびスポーツクラブの経験種目と時期

経験種目	幼児期				小学校				中学校				高等学校				合計		
	幼稚園	地域	その他	小計	クラブ	少年団	地域	その他	小計	部活動	少年団	地域	その他	小計	部活動	地域		その他	小計
バスケット				0	28	6			34	39	1	2		42	22	0	0	22	98
バレーボール				0	14	5	2		21	36				36	13	0	0	13	70
ソフトボール				0	13	2	2	3	20	29				29	20	0	0	20	69
陸上				0	10		2		12	26				26	21	0	0	21	59
水泳	4	4		8	5	6		8	19	3		2		5	3	2	0	5	37
テニス				0		4		1	5	11				11	7	0	1	8	24
ハンドボール				0	2				2	7				7	15	0	0	15	24
剣道		1		1	2	6	1	1	10	9				9	2	0	0	2	22
体操	2	1		3	5		3		8	2		1	3	3	0	1	4	18	
バドミントン				0	3	2	3		8	3				3	1	0	0	1	12
卓球				0	2	1			3	4				4	2	0	0	2	9
バレー			1	1	2			2	4			1	1		1	0	1	7	
スキー				0	1			1	2	1			1	2		0	1	5	
スケート		1		1	1				1					0	0	0	0	2	
野球				0	1	1			2					0	0	0	0	2	
その他				0	3				3	0				0	4	0	0	4	7
合計	6	7	1	14	89	33	13	16	151	170	1	4	3	178	109	3	3	115	458

増加になった。中学生になると地域または少年団・その他のクラブなどでのスポーツ活動経験者はかなり少なく、スポーツ活動の中心は学校となっていた。中学校での経験種目は、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール、陸上競技、テニス、剣道、ハンドボールの順であった。上位の三種目は小学校での経験種目と同じであるが、テニス・ハンドボールなどが多くなり、水泳、その他のスポーツの経験は減少していた。

高等学校時代の経験種目は中学時代と同様な傾向であった。なお学校の部活動で対応できない種目は、地域など学校以外でのクラブなどで活動していた。高校時代における経験種目の内容は、バスケットボール、陸上競技、ソフトボール、ハンドボール、バレーボール、テニス、水泳の順であった。中学時代の種目と比較してみると、一位はバスケットボール、三位ソフトボールは上位であるが、二位に陸上競技が、また四位にハンドボールが上り、バレーボールが順位をさげていた。

IV. 考察

今回対象とした大学女子サッカー選手の中でサッカー一部未経験者は、調査対象172名中125名で、これは全体の73%を占め、ほとんどの選手がサッカーの未経験者である。大学四年生が27名で、この学年が大学入学した1993年は、日本サッカーにプロが誕生した「Jリーグ発足」の年、また1989年に女子サッカーの「Lリ

グ」が誕生している。以前の大学女子サッカー選手でサッカー未経験者の割合がどの程度なのか資料がないので、27名が多いのか少ないかは比較検討ができない。しかし、Jリーグ発足後世界的に有名なサッカー選手を目の当たりにすることができるなどから全国的にサッカー熱も一段と高まり、日本サッカーが大きく発展する時期にあたり、この様な世論に影響され下級生の新入部員も徐々に増加し、今回の調査対象の一年生が37名に達したものと思われる。

これら未経験者のスポーツ活動歴は、小学校から高等学校を通じてバスケットボールが最も多かった。バスケットボールは対人競技であり、接触プレーが多く、これは使用部位が手と脚の違いだけで、戦術的に似ているところが多い。また、相手と味方の動きなどについての個人的戦術もサッカーと類似するところがある。さらには、走り方やスピードの変化、身体の使い方など身体的能力発揮もサッカーに 응용が効くものと考えられる。この様なことから、世論のサッカーに対する関心度が高まってきた事による影響、またバスケットボールとサッカーに類似した要因から、バスケットボールの経験者が多いものと考えられる。

次いでバレーボールやソフトボールと球技の経験者が多く見られ、さらには個人種目の陸上競技、水泳であった。陸上競技や水泳は、個人種目の中でも最も高度な身体的資質を必要とする。また、女子のスポーツでバレーボールやソフトボールは、ボールや相手に対

する反応の速さや身体の調整能力の高さなども特徴づけられるが、それ以上に、身体的資質の中でも体力的に自信がある選手が多い。サッカーは男子のスポーツと見られていたものが、女子にも門戸が開かれたものの、やはり体力的能力の特徴から、動機として比較的体力に自信のあるこれら種目の経験者が大学入学時にサッカー部を選んだものと推察する。

一方、大学入学以前のサッカー部経験者は47名で、これは全体の27%である。経験年数の長い者は小学校から高等学校と継続している者もいるが、年代別に見て、最も多いのは高校時代が36名、次いで小学校時代の23名で、これらに比較して中学校時代は4名と極端に少ない人数となっている。小学校時代は男女の体力差が見られないところから、男女混合のクラブ活動が可能であるため経験者数が多い傾向にあったと考える。また、今回の調査対象者の四年生が高等学校に入学したのは1990年で、この年は日本サッカーが「プロへの呼びかけ」、1992年が「プレJリーグ」、1993年「Jリーグ発足」とサッカー界が一段と発展する胎動期であった。さらには日本女子サッカー界に実業団を中心とした「Lリーグ」が1989年に発足、またそれ以前の1979年に日本サッカー協会に女子サッカーを「第五種」として認可され、日本女子サッカーが本格的に始動した時期でもある。このような背景が高等学校に少なからず影響を及ぼし、男子のサッカー部とともに女子サッカー部の設立がなされ、高等学校時代での経験者が多く見られる様になったのではないかと考える。また、表IIに見られるように下級生ほど上級生に比較して、サッカー部経験者が多い傾向にあることは、このような時代背景によるものであると考える。

これらに対して、中学校時代のサッカー経験者が極端に少ない。鈴木²⁾が発育発達時期でいろいろな運動機能を一番身に付きやすいこの時期にサッカーのできる環境が整備されていないことは、今後の大きな課題であると述べている。中学校時代サッカーから離れざるを得ないこのような、環境は日本女子サッカーの将来に大きな損失にもなると云える。また、日本サッカー協会が⁴⁾女子サッカーの底辺拡大ならびに普及を重視しているならば、この中学生年代における女子サッカー環境の充実を重点課題として取り組む必要があるも

のと考える。

女子がサッカーを部活動ならびに地域のクラブ以外で経験できるのは、主として学校体育の授業である。文部省指導要領⁸⁾によれば小学校の体育の目標に運動領域として、低学年がゲーム運動、これに対して高学年がボール運動が重点指導項目になっている。また、小学生の体力は男女差があまり見られないことから、男女一緒の授業形態が多く取られている。その結果、特に小学校高学年での授業経験者が多く示されたものとする。中学校⁹⁾および高等学校¹⁰⁾においては、体育分野の領域及び内容の球技の中から選択種目の一つとしてサッカーを履修した経験者が示されたものである。小学校時代と比較して経験者が少ないのは、この時期は男女の体力差がはっきりする時期で、別々の授業形態となり、サッカーの授業経験が少なくなったと考える。しかし、高等学校は中学校に比較してやや多く、しかも高学年になるにしたがい多い傾向にある。これが時代背景による生徒の興味によるものか、それとも指導者のサッカーへの啓蒙および動機付けによるものか判断できないが、女子がサッカーへの関心を少なからず示し始めた事によるものとする。

大学女子サッカー選手が幼児期から高等学校時代までにサッカー遊びを経験した時期については、全体の約8割が小学校時代に経験していた。この時期は男女差がないため当然と云えば当然ではある。その中でも、小学校低学年より高学年がよりサッカーを遊びとして多く経験していた。最近幼稚園や保育園などにおいてもサッカー遊びを取り入れているところが多い。この様に女子がサッカーに接することが多くなることは、今後の女子サッカーの発展に期待がもてるものとする。

V. まとめ

大学女子サッカーの向上と発展のために選手育成ならびに今後の指導に役立てることを目的に、大学の女子サッカー部に所属している選手を対象にアンケート調査した結果をまとめると以下の通りである。

1. 大学入学以前のサッカー部経験者は27%と全体の三分の一以下で、ほとんどの選手が大学入学後に本格的にサッカーを始めている。また、経験者を学年別

に比較してみると、上級生に比較して下級生の経験者が多いのが認められた。

2. サッカー部員としての経験時期は、高等学校時代が一番多く、次が小学校時代であった。それも学校と地域のクラブで行われていた。しかし、中学時代は、全体の4名と少なく、これは地域のクラブで行っていた者ばかりである。

3. 授業でのサッカー経験は、小学校が一番多く、次いで・高等学校時代の順で、中学校時代は少なかった。また、遊びにおけるサッカー経験は、小学校時代の高学年が最も多いのが認められた。

4. サッカーを始める前の運動部種目は、バスケットボール、バレーボール、ソフトボールなどの球技が上位であり、次いで陸上競技、水泳など体力・運動能力の高い種目の経験者が多かった。これは種目の特性ならびに体力的能力がサッカープレーの基礎となることに関わっていることを示唆するものである。

参考文献

- 1) 大住良之：新・サッカーへの招待、P219-222、岩波書店、1998
- 2) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 18、1994
- 3) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 37、1995
- 4) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 44、1996

5) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 53、1997

6) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 64、1998

7) 日本サッカー協会機関誌：J, F. Anews、No1 70、1998

8) 文部省：小学校指導書、体育編、東洋館出版社、1998、

9) 文部省：中学校指導書、保健体育編、大日本図書株式会社、1996

10) 文部省：高等学校指導書、保健体育編、大日本図書株式会社、1996

11) 渡辺貫二：女子サッカーの試合におけるアウトオブプレーに関する研究、P87、日本サッカー協会平成3年度科学研究委員会報告書、1991

12) 渡辺貫二：女子サッカー選手の体格と体力に関する研究、-大学一年時と大学四年時の体格と体力の比較-、P660、日本体育学会第43回大会号、1992

13) 渡辺貫二：女子サッカー選手の運動分析について、-大学選手と日本リーグ選手の比較から-、P57-60、国際学院埼玉短期大学研究紀要第16号、1995

14) 渡辺貫二：女子サッカー選手の筋力特性に関する基礎的研究、P112、日本運動生理学会第5回大会号、1997

(平成11年4月16日受付)